



司会 川島 眞

東京女子医科大学皮膚科 教授

今泉明子

東京ミッドタウン皮膚科形成外科
Noage 院長

渡邊千春

千春皮膚科クリニック 院長

患者さんの肌質に合わせた 化粧品の選び方

皮膚科医にとって、患者さん一人ひとりの肌質を十分に把握したうえで化粧品を選択することは理想であるが、実際には難しい状況である。そこで、本座談会では美容皮膚科診療に第一線で携わる先生方に患者さんの肌質に合わせた化粧品の選び方についてお話しいただいた。また、座談会に先立ち、他の先生方からもご意見をうかがい、本座談会の参考とした。

化粧品によるトラブルの実際

川島 われわれ皮膚科医の化粧品とのかかわりのひとつに肌トラブルがあります。化粧品でかぶれたと訴える患者さんが受診され、なかには自分の肌に適した化粧品を見つけてほしいと訴える患者さんもいます。本日は化粧品によるトラブルや患者さんへの化粧品の勧め方についてお話をうかがってまいります。

まず、化粧品によるトラブルについて先生方の診療の実感としてはい

かがでしょうか。

渡邊 化粧品が原因ではないかという疑いをもたれて受診される患者さんでも、実際には特定の化粧品トラブルではなく、洗顔の方法や化粧品の使用方法に問題があることも多いです。たとえば洗顔方法の指導で改善することもあり、真の意味での化粧品トラブルとは少し違いますが、それも含めるとかなりの数になると思います。

一方で、患者さんからの訴えがない場合でも、医師側で化粧品が原因

ではないかと疑う場合もあります。化粧品が合っていない可能性がある。と患者さんにお話ししても、前から使っている化粧品だから大丈夫だと言われることがあります。このような場合、今まで問題なく使用していた化粧品でも感作されることをご説明する必要がありますね。

川島 そうですね。アンケート結果(p59より掲載)では、「化粧品によるトラブル」を訴える患者さんに対する“本当の”化粧品トラブルの患者さんの割合にはばらつきがありま